ＶＩＩＩ。調査総括

１．人格育成教育としての日本語教育の重要性

中南米の移住者・日系人は移住先国の国民として、例えばブラジルの場合であればブラジル人として、日本の魅力を発信して地域社会に貢献したいと皆さん思っておられました。良きブラジル人たるためには良き日本人たらん、とまで言われた方もおられたほどです。

そのための日本語教育は幼児期における教育が極めて大切で、単なる言語知識の付与としての教育ではなく、礼節・勤勉・正直・仕事への責任感・清潔感・奉仕精神等の日本人の美徳を含めた教育が強く求められ、日系・非日系人を問わず、日本語を通じて文化・教養・道徳・思いやり・健康・環境までも併せ教育する全人格教育を行いたい、との要望が確認できました。

中南米では、学校における教育は知識の付与のみで、人格に関する教育は、家庭、教会、社交クラブ等で行われるため、中層家庭以下の児童は、残念ながら、人格・情操面で問題が多い由でありました。ブラジル政府もこれを理解はしていても、対応可能な教師不足等もあり、取り組みは形骸化しているとのことであり、しつけや人格・情操教育までもしてくれる日本（語）学校への期待が、現地の人たちからも極めて強いことも確認できました。

現実に、午前は現地校としてポルトガル語／スペイン語による正規の授業、午後に日本語の授業を行っている学校や、ポルトガル語／スペイン語による授業システムの中に外国語として日本語クラスがあり、日系・非日系人共に全員が必須科目として日本語および日本の文化や習慣を学習する学園もありました。そのような学園の一つは、サンパウロ大学への進学率の高いことで知られる有名校にまでになっています。

さらに、現場の先生方の願いは、日本の技術や日本の発展の歴史までも日本の魅力として発信したい、ということでした。

２．日本語教育方法の在り方

言語の学習には、語学としての体系的な知識の習得だけでは不十分で、現実の場面における言語の運用能力、すなわちその場その場に適したコミュニケーション能力が必要です。

そもそも多言語社会ではこれは当たり前の能力であり、この能力を失調している民族は消え去るしかなかったことは容易に理解できますが、異質な人とのコミュニケーション能力はなにも多言語社会に特有の能力ではありません。ほとんど単一言語社会であった日本でも、国土が東西および南北に長く、気候風土や風習が少しずつ異なるため、社会造りを進める過程で、様々な異なる意見を持つ人々とコミュニケーションを重ねたことは想像に難くありません。

しかしながら、近年、異質な人たちと協同した社会造りの経験がほとんどなくなったためか、そして、初めてといえる外国語である「英語」を、語学として体系的な知識習得のみに専念してしまった結果なのか、我々日本人は、人とのコミュニケーションの重要性を忘れてしまったのではないでしょうか。最近の日本人を見ていると、こうした危惧を抱かざるを得ません。

今回の出張では、日本の魅力の発信という課題だけでなく、異なる人とのコミュニケーションという課題についても日系社会から多くを学ぶことができました。

人間は、集団で仕事をして社会を造ってまいりました。そのために最も必要な道具がコミュニケーション道具、つまり言語であります。言語は、仕事のための意思疎通の道具、秩序や絆を築くための道具、リラックスのための道具、人造りのための道具、教養のための道具、社会性・社交性維持のための道具等々であり、どこの国においても、それぞれの社会造りにとって最も大切な道具なのです。

したがって、その道具の使い方を学ぶーつまり言語を学ぶということは、その社会造りの在り方を学ぶことに他ならないのです。我々の祖先はそのことをよく知っていて、日本語を学ばせる幼児・児童・生徒の教育に、社会造りを学ばせる人格形成教育を取り入れたのでありましょう。

そして、だからこそ、その教え方は、社会造りと関連させて、現実の用途に合わせ活き活きと道具（言語）を使いたくなる（少なくとも、使おうと努力したくなる）教え方が必要です。そうすれば、学習者は社会に対する様々な関心

を呼び起こし、活き活きと社会に向かうことができるでありましょう。
　サンパウロ日系社会の幹部の方から、日本語の教師には、言語知識のみならず、道徳、学問、美術、思いやり、健康、環境等の高い教養を身につけることが是非とも必要、とのご意見もいただきましたのはまさにこのことを裏付けるものだと思います。

　今回、短い出張ではありましたが、日本語教育の在り方として、
（１）学習者のレベルに応じ、日本の社会（造り）への関心や興味を喚起するような、魅力ある素材の選定と教材の開発が極めて重要である。
（２）自発的な学習意欲が喚起されるような教授法の確立と、それを身につけた教員の育成が喫緊の課題である。
ということが確認できたことは大変に有意義でありました。

３．ＪＩＣＡの日本語教育協力における３事業の連携と活用

　日本語教育を通じて日本文化の素晴らしさを伝え、活き活きと地域の人造り・社会造りに取り組むことができる人材を育成するためには、調査概要で述べられた通り、本邦における日系研修事業、現地における汎米研修事業、本邦より現地へのボランティア派遣事業の、効果的連携が極めて大切です。
　具体的には、上記概要にもある通り、システマティックな段階的教師育成研修としての日系研修４コース（基礎Ⅰ、Ⅱ、応用初級、応用専門）の内容の周知徹底、本邦研修の段階的教師育成システムに呼応した汎米研修計画策定、そして、各日系団体・日本語学校における、これらを踏まえた現地日本語教師育成計画の策定と各ボランティア活用計画の策定であり、ＪＩＣＡ側と各日系社会とのさらなる緊密な連携が必要です。そして、これには、ＪＩＣＡ側の切磋琢磨は是非とも必要ですし、実際に実行してまいりますが、各日本語学校の主体的な計画造りも不可欠ですので宜しくお願いする所存です。

４．ＪＩＣＡ事業としての日本語教育支援の重要性

ＪＩＣＡが行なう国際協力とは、開発途上国の人々と共に、人間らしい生活ができる社会造りを目指すことです。そして、そのために大切なことは、異文化の人々と連携できる強さや柔軟性、および社会造りに必要な技術や方策への深い洞察です。加えて、相手の期待に応えられる充分な技量と共に、そもそも日本から協力を得たい、という信頼感を醸成するに足る魅力の発信が極めて重要であります。

他方、フロンティアスピリットを持って、移住先国のいわば異文化の人々と共に暮らしやすい社会を築いてきた海外移住者は、この観点からすれば国際協力の先駆者ともいうべき人たちで、様々な困難を乗り越え、移住先国において信頼と尊敬を得ています。それは、彼の地の人々との社会造りの実践の中で醸成されたものですが、知らず知らずのうちに、日系人に潜在する日本人の魅力が醸し出された結果であろうと推察できます。

したがって、日系社会の経験は、国際社会への魅力の発信を模索する本邦社会にとって大いに参考とすべきものであります。現在、日系社会では世代交代が進み、日系社会の移住先国への魅力の発信の在り方について、特にその象徴としての日本語教育の在り方について様々な議論が起きています。日系社会の問題は、やがて本邦社会の問題となる可能性もあり、本邦社会はその課題を共有し共に学び合うことが重要です。

今回の出張は、実に多くのことを得ることのできたすばらしい出張でありました。それは、良きブラジル人、良きボリビア人になるために、日本のすばらしさを発信してそれぞれの地域社会に貢献しようと努力されている方々の、活き活きとした生き方に触れることができたからであります。一期一会という出会いの尊さを実感させていただきました。異文化との出会いが、日本人（実際にはブラジル人でありボリビア人ですが）をこれほどまでに輝かせたのだと思います。それは、我々ＪＩＣＡが日々実践している国際協力にとって、最も大切ともいえる地球市民の輝きです。

ちなみに、上記２．で述べた「言語」を「技術」とか「国際協力」という言葉で置き換えてみて下さい。

「国際協力を学ぶことは社会造りの在り方を学ぶこと」、になりますし、「現実の用途に合わせ活き活きと技術や国際協力を使いたくなる教え方が必

要・・で、そうすれば、学習者は・・活き活きと社会に向かえる」、になります。

このように、言語の本質も国際協力の本質も極めて類似しています。本邦社会では、顔の見えない日本人とか顔の見えない援助、と言われて久しいのですが、それは、異質な人との社会造りの実践が不足しているためではないでしょうか。地球市民としての取り組みや実践が強く求められる所以です。

特にＪＩＣＡは、開発途上国の人達が、活き活きと社会を築こうと努力したくなるような技術の伝え方を開発していく必要がありますし、実際にそれに携わる人材やリソースの発掘・育成、そして、地球市民として、国民一人一人が参加したくなるような国際協力への関心促進が極めて重要です。現在、開発教育という形をとって、地球市民を育てる様々な模索を行っているのはまさにこの観点からであります。日系社会もＪＩＣＡも、日本語教育を通して活き活きとした社会造りの在り方を、互いに参考とし、尊重しあい、そして学びあうことが大切でありましょう。

これから地球市民として世界の中で輝かねばならない本邦社会の我々にとって、日系社会の様々な課題や取り組みは、本邦社会を見直す良いお手本であると強く確信して帰国してまいりました。